“おもしろくて　ためになる　学びの共有（わかちあい）”

秋田県教育カウンセラー協会機関誌

教育カウンセラー　あきた

第24号
２０１６年（平成２８年）７月２日発行

「チーム学校」成功の条件

秋田県教育カウンセラー協会
代表　濱田　眞

昨年９月に公認心理師法が公布され、わが国では初めて心理職に国家資格が付与されました。社会の「サービス業化」に伴い、対人マネージメント、メンタルヘルス等の重要性が広く認識され「心理の専門家」を求めていることがその背景にあると思われます。さらに、次期学習指導要領の改定に合わせて「チーム学校」構想が具体化されつつあります。さて、「チーム学校」とは何でしょうか。それによって学校はどう変わるでしょうか。文科省のＨＰを覗いてみましょう。

「学校が、より困難度を増している生徒指導上の課題に対応していくためには、教職員が心理や福祉などの専門家や関係機関、地域と連携し、チームとして課題解決に取り組むことが必要である。例えば、子供たちの問題行動の背景には、多くの場合、子供たちの心の問題とともに、家庭、友人関係、地域、学校など子供たちの置かれている環境の問題があり、子供たちの問題と環境の問題は複雑に絡み合っている。単に子供たちの問題行動のみに着目して対応するだけでは、問題はなかなか解決できない。学校現場で、より効果的に対応していくためには、教員に加えて、心理の専門家であるカウンセラーや福祉専門家であるソーシャルワーカーを活用し、子供たちの様々な情報を整理統合し、アセスメントやプランニングをした上で、教職員がチームで、問題を抱えた子供たちの支援を行うことが重要である。校長のリーダーシップの下、チームを構成する個々人それぞれの立場や役割を認識しつつ、情報を共有し、課題に対応していく必要がある。」

ぜひ実現してほしいものです。それでは「チーム学校」成功の秘訣は何でしょうか。私は少なくとも次の条件が不可欠であると考えます。

①見取る力

子どもたちと日常的にかかわっている教職員の見取る力（アセスメント能力）が問題の早期発見、予防的対応の決め手となります。

②組織的対応

子どもや保護者に最も近い教職員が中心となり、専門スタッフと協力して組織的に問題に取り組むことが重要です。文科省は「教員がいじめや問題行動、また、家庭環境などの問題を生徒指導に関する専門スタッフに任せきりにするようでは、かえって問題をうまく解決できないことも考えられる。」と注意を促しています。

③学校文化への理解

医療機関等におけるカウンセラーは「治療的枠組み」に基づいて行動しますが、学校においては「教育的枠組み」に基づき、学校スタッフの一員として行動する必要があります。そのためには学校文化（学校がいかなる基盤の上に成り立っているのか）に対する理解が不可欠です。

秋田県教育カウンセラー協会は、「教育的枠組み」を重視したカウンセリング研修に力を入れてきました。それは、①子ども保護者に寄り添う的確なアセスメント、②予防的・開発的カウンセリングを中心にした組織的対応、③教育相談への理解に基づく開かれた学校文化の形成、等です。教育カウンセラー協会で研修を積んだ皆さんが「チーム学校」における中核的役割を果たす日が来ることを心から願っております。

教育コラム

私の授業論
～「しゃべるな 座るな」について～

授業するにあたって配慮すべきことはたくさんありますが、私が教師になって間もない頃、ある先生から**「しゃべるな　座るな」**が授業の基本だと言われたことがありました。

教師の話が多いと子供の思考は拡散し、停滞します。結果として子供たちはやるべきことが掴めず隘路に迷い込むことになります。例えば、教師の第一次の発問・指示で子供が戸惑っている時、教師は言い方を変えて再度発問したり指示を出したりします。それでも伝わらない時にはさらに補足します。発問や指示が出ている間、子供たちは聞くことに集中しますので思考は滞ります。最終的には子供たちの活動開始までに多くの時間が費やされ消化不良の授業となってしまいます。

十分に吟味され練り上げられた授業とは教師の一言で子供が考え、動き、その時間の課題を解決していく授業です。私はその先生から「一時間の授業で教師が一言だけ話して終わる授業こそがよい授業である。授業中に自分が何回口を開いたか記録しておきなさい。」とも言われました。もちろん、教師の一言でその授業が展開できるなどということはあり得ないでしょうし、教師が**「しゃべらない」**というのにも限界があります。その先生もそのことは十分に分かり、「教師の一言」が如何に重いものなのかを受けとめ自らをも戒めていたのではないかと思います。

ところで、授業中に子供が課題解決に向けて取り組んでいる時、教師は何をしているでしょうか。**「座るな」**というのは、子供たちの課題解決場面では机間巡視し、子供一人一人の取り組み状況を把握しなさいということです。「子供の実態を把握した授業展開」という言葉はよく聞きますが、実際にどのように把握しているかとなると極めて曖昧なような気がします。テストの結果を見たり、提出されたノートを見たり…。いわばペーパー的な資料が主になっていることが多いのではないでしょうか。こうした把握は、それらの結果のみを見て“こうなのだろう”“こうに違いない”という類推が先に立ってしまいます。

個々の子供の実態はその子供がその課題に取り組んでいる時にこそ顕著に出てきます。だから机間巡視が大事なのです。机間巡視を通して子供を見届け、支援する、そんなきめ細かな対応が求められているのだと思います。

日本の学校教育は極めて優れたものだと私は考えています。最近はティームティーチング等の見地から複数の教師が教室に入ることも珍しくなくなりましたが、まだまだ一人の教師が 30 人前後の子供たちを指導するのが一般的です。そうした教授法にもかかわらず子供たちが生き生きと授業に参加し、成長できるのは教師がそれらの子供たちに寄り添って授業を作っているからです。子供の今の状況を捉え、一人一人の子供の反応を確かめながら授業を展開するというノウハウが学校教育の中で培われてきたからでもあります。

今次の中央教育審議会での様子が次第に明らかになるにつれてアクティブラーニングという言葉を頻繁に耳にするようになりました。グローバル化した現代、自らの可能性を最大限に発揮しよりよい社会を作り上げていくことが求められています。その意味で“アクティブラーニング論”へと向かうのは当然の帰結だとも言えます。また、こうした学習を推進するためには学校におけるカリキュラムマネージメントの在り方が必要だとも言われており、これもその通りだと思います。しかし、子供一人一人を見つめ、一人一人の子供の成長を保障する授業を構築できなければそれはかけ声倒れになってしまいます。

「しゃべるな　座るな」については、小学校、中学校、高校を問わず授業者としてごく当たり前に行われていなければならないことでもあります。とは言え、実際の日々の授業ではどうなのでしょうか。私は教員として子供たちの前で授業することはなくなってしまいましたが、時々この言葉が蘇ってきます。

（秋田県教育カウンセラー協会
代表代行　　渡辺　一郎）

実践から想うこと①

ともしび
～心を支えていたもの～

学力向上！と言われてもまず先に温かい人間関係作りを私たちは考えるのではないでしょうか。このカウンセラー協会の講座に参加したのは、母の七年以上にわたる想定外の入退院の連続で心身ともに疲れて仕事に集中できないでいた頃です。カウンセリングの理論そして実際につなげる手立てを実感もって学べ、まさに「おもしろくて　ためになる　学びの共有」でした。また「いいとこ四面鏡」で自分の自己肯定感が恐ろしいほど低いことにも気付きました。仕事は山あり谷ありでしたが、忘れられない保護者にもたくさん出会いました。A 子さんは一生懸命な方。わが子の友達関係の様々なトラブルで謝ることもしばしば、周りの大人にも子どものことを言われ辛いこともあったように思われました。特支入級で子どもに手立てをとるも、やはりキーマンのお母さんを絶対に元気にしなければと思うことが発生し校内の特支部の先生に手伝ってもらって「いいとこ四面鏡」をしました。連絡帳に「私も他のお母さん方のように子育てを楽しんでみたいと思います。」との感想。子どもも努力し落ち着き成長しました。離任時「新しい学校でも心の灯（ともしび）になって頑張って下さい。」と過分なお手紙を頂き、今度は私がその手紙を心のともしびに頑張ることができました。この三月、私は退職しました。私にとってゆとりのある生活（介護）をしたくてです。「今とても幸せです。」と言うともっと驚かれてしまう方もいます。人生は自己決定の連続ですが、自分らしく生きることに辿り着けたのはこのカウンセラー協会で「学びの共有」をしながら、自分の自己肯定感を高めることができていたからこそ、と思います。子どもの自己肯定感の低さや人間関係の希薄さを指摘される昨今、教育カウンセリングの果たす役割が大きいのは言うまでもありません。教育に携わる機会と力に恵まれている皆さんをこれからも応援していきたいと思っています。

（元小学校教諭
　協会理事　　木村　優子）

実践から想うこと②

西かがやき教室での
仕事を始めて感じた想い

私は平成 28 年の 4 月から、西かがやき教室のスタッフとなりました。西かがやき教室とは、横手市に新しくできた適応指導教室です。今年で 19 年目になる南かがやき教室の、姉妹教室にあたります。

西かがやき教室での生活の特徴は、「じっくり、ゆっくり」と過ごし、「いいなぁ」と感じられることです。教室内の鉢と玄関のプランターで花を育てたり、グラウンドゴルフやアスレチックで運動したり、カフェのような雰囲気でゆったりとくつろいだりしながら、生徒たちと毎日を過ごしています。

中学 1 年生の夏、私は学校に行けなくなった自分に悩み、自己肯定感が低下していました。学校に行けない自分が嫌で嫌で、仕方ありませんでした。しかし、冬に南かがやき教室を知り、先生や仲間との出会いで、エネルギーが満ち溢れ、将来の目標を持てるようになったのです。

少しずつエネルギーを取り戻してきた私は、「将来は自分と同じ悩みを持つ人たちの力になりたい」という目標を持てるようになりました。その後、中学 2 年生から中学校に復帰した私は、高校、大学、大学院を経て、同じ「かがやき」と名前の付く教室に戻ってくることができました。多くの人の応援を受け、目標を達成することができたのです。今度は、この西かがやき教室を「エネルギーを充填できる場」にしていくことが、私の新たな目標です。通級している生徒たちだけでなく、相談に来てくださる保護者の方や、学校の先生など、訪問してくれるすべての人に貢献していきたいです。生徒たちを普段から支えてくださっている保護者の方や、学校の先生も一緒になってエネルギーを充填していくことで、生徒たちの社会復帰へ向けた、充実した適応支援ができると考えています。

まだまだ始まったばかりですが、今後とも西かがやき教室をよろしくお願いいたします。

（西かがやき教室　教育相談支援員
　　協会事務局員　　江村　慎平）

研修講座・養成講座 講師の先生のご著書紹介

大竹　直子先生（千葉大学 カウンセラー、法政大学・大学院 兼任講師）
「とじ込み式 自己表現ワークシー〈２〉
**　　ー教室で保護者会で保健室で相談室ですぐに使える！」**（図書文化）
　私立中学校・高等学校、公立小学校・中学校のスクールカウンセラーの実践・経験から「自己表現ワークシート」を作成。続編は、キャリア教育、保護者用、教師用のシートを追加。
　自分の気持ちを言葉やイメージなどを使って表現することで、こころが安定し、育っていくといえます。（図書文化 HP 等より）

河村　茂雄先生（早稲田大学教育・総合科学学術院 教授）
「組織で支え合う！学級担任のいじめ対策
**　　ーヘルプサインと向き合うチェックポイントとＱ・Ｕ活用法」**（図書文化）
　全国のいじめ事例、及びＱ－Ｕデータの分析に基づく、いじめ対策を形骸化させないためのチェックポイントが掲載されています。また、いじめの早期発見に有効と思われる知見や、Ｑ－Ｕ結果を早期発見に活かす方法などもまとめられています。（図書文化 HP より）

藤川　洋子先生（京都工芸繊維大学 特定教授）
「教育の新課題　非行臨床の現場からとらえた子どもの成長と自律」（明治図書出版）
　この本の執筆者は、現職の家庭裁判所調査官、保護監察官、法務教官（少年院の教官）、そしてその経験者、若手研究者たちです。いずれも非行臨床の現場を知り尽くしたエキスパートです。「警察沙汰」の先で、立ち直りを支援する体制はどのように組まれ、そこにはどのような課題があるのか。そこで示される現実は、子どもの成長と自律を考える上で重要な示唆に富んでいます。また、非行に現れる発達障害の特徴、司法面接の方法、犯罪被害と子どものケアなど、学校現場で役立つ情報が満載です。（「BOOK」データベースより）

諸富　祥彦先生（明治大学 教授）
「知の教科書　フランクル」（講談社選書メチエ）
　フランクルは、精神神経科医・心理療法家として「ロゴセラピー（実存分析）」を創始・活躍していましたが、1942 年にナチスのユダヤ人収容所に送られた。三年近くの苛酷な収容所生活を生き延びて解放されると、ふたたび心理療法家として、また著作家として精力的な活動を再開し、「人生における意味」を追究します。本書は名著『夜と霧』の著者フランクルの思想と実践的活動を合わせた全体をわかりやすく解説しています。（講談社 HP より）

編・集・後・記

　代表代行の渡辺一郎先生の「机間巡視を通して子どもを見届け、支援するきめ細かな対応」、「一人一人を見つめ、一人一人の子どもの成長を保証する授業の構築」の必要性、木村優子先生の自己肯定感を育みながら「温かい人間関係作り」に取り組まれてきた実践報告、江村慎平先生の「生徒たちの社会復帰へ向けた充実した適応支援」に向けた報告それぞれが、代表の濱田眞先生が今回「チーム学校」構想の具体化に向けての成功条件と合致していることを興味深く読ませていただきました。「おもしろくて　ためになる　学びの共有」がそれぞれの活動の場で実践されて広がっていることが感じられる機関誌に仕上がりました。そして「ご著書のご案内」でご紹介した素晴らしい先生を講師にお招きする研修講座や養成講座を通して「学びの共有」の輪が今年度もますます広がっていくことを楽しみにしています。（K）